



2013年6月26日放送

漢方を理解するための10処方

日本漢方振興会漢方三考塾 講師 高山 宏世

(5) 補中益気湯 (ほちゅうえつきとう)

この処方のキーワードは「気虚・中気下陷」。

弁証のキーワードは①倦怠無力感、②精気に乏しい、③腹部軟弱・臍に動悸、です。

(どんな処方か?)

補中益気湯は金時代の12世紀から13世紀に活躍した名医、李東垣(1180—1251)が著した『脾胃論』の中に出てくる有名な処方で、文字通り「中即ち脾胃を補い元気を益す薬」で、医王湯という別名を持っていて、歴代の処方集には必ず記載され、現代でも最も頻用されている補気剤の筆頭です。

本方が創製された当時の中国は戦乱の世で、人々は常に飢えと寒さに苦しみ精神的にも不安な日々を送っていました。このような世の中なので病人が数多く発生していましたが、『傷寒論』の教えに基く治療を施しても一向に効果が無く、病人の多くは体力や抵抗力が不足して病に斃れている、という事実を見て李東垣は「脾胃傷ラルレバ百病由リテ生ズ」ことに気付き、脾胃を温補することを基本にして万病を治す治療法を会得したのです。

飲食の節制を怠る、酷寒や炎暑などの過酷な環境下に身を置く、或は常にストレスや過労の状況に置かれると、人は脾胃を損傷します。脾胃が虚弱になれば気血生成の源が欠乏するので、五臓六腑を始め全身に十分エネルギーを行き回らせたり、栄養を与えることが

できなくなって心身が弱体化し、環境に適応したり病気に対抗するための正気が不足して、各種の疾患を生じるようになります。

本方を用いる目安としては昔から津田玄仙（1737-1809）という人が『療治経験筆記』の中に述べた 1、手足の倦怠 2、言語が軽微 3、眼に力が無い 4、口中に白い唾を出す 5、食物の味がしない 6、温い食べ物を好む 7、臍に動悸を触れる 8、脈は散大で無力、と言う八項目が有名です。これを実際の経験から見ると、主訴は全身倦怠感が多いですが、特に足が重いという人が多く、さらに疲れ易い、すぐ息が切れる、食欲が無いといった身体的な訴えと、特に病気でもないのにすぐ疲れる、カゼを引き易い、何かしようと思っても気力が湧かないし何もしたくない、と精神的な疲労感や無気力を訴える病人も多く、どれも気虚の証に当てはまりますが訴えの内容は多彩です。

望診から受ける印象は全体に元気が無く、生気に乏しく、声は低くボソボソと不明瞭です。

舌は締まりが無く淡白膨潤して、薄い白苔があります。

脈は芤脈という力が無くて弱い脈、中空の葱を押えた時のような感じの脈と表現している書物がありますが、まさにピッタリの感じです。

腹部は軟弱無力です。臍の辺りでよく腹部大動脈の搏動を触知します。圧痛は何処にも有りません。

これらの所見はすべて気虚の症候です。

（補中益気湯の原典）

『脾胃論』の中「飲食勞倦シテ傷ラルル所始メニ熱中ヲ爲ノ論」の部分を少々長いですが抜き出して見ます。

「内傷不足ノ病、旬（タダ）誤リ認メテ外感有余ノ病ト作シテ反テ之ヲ瀉セバ則チソノ虚ヲ虚スル也。実ヲ実シ虚ヲ虚ス、此ノ如クシテ死スル者ハ医之ヲ殺スノミ。カカル時ハ則チ如何ンセン。惟レ当ニ辛甘温ノ劑ヲ以テ其ノ中ヲ補イ其ノ陽ヲ升シ、甘寒ヲ以テ其ノ火ヲ瀉スレバ則チ愈ユベシ。経ニ曰ク、勞スル者ハ之ヲ温メ損スル者ハ之ヲ益スト。又云ウ、温ハ能ク大熱ヲ除クト。大イニ苦寒ノ藥ヲ忌ム。ソレ脾胃ヲ損スレバ也。脾胃ノ証初メテ得ル時ハ則チ熱中ス。今立チテ始メニ得ルノ証ヲ治ス」

この文章では本方を創製した事情と、脾胃を温補することの重要性を述べています。

タイトルと最後の「脾胃ノ証初メテ得ル時ハ則チ熱中ス」は発熱という症状を診ても全部が実証とは限らず、脾胃が衰えた気虚の証でも発熱する場合は有り得るということで、虚実を誤ることの危険性を説き、どのような時でも虚証は必ず補すべきことを強調したものです。

過労で消耗した人、体質虚弱な人、或は体力が弱い幼児や老人は無理や過労を重ねると、

その過酷な状況に耐える為に一時的にカラ元気を出すので体温も若干上昇します。しかし、これは気虚発熱と言って正気が病邪を駆逐しようと反応して発す正常な熱ではなく、見せかけの新陳代謝亢進による一時的な発熱なので、結果的には正気を益々消耗してしまいます。此の場合大至急正気を守り補うべきで、逆に病邪を攻めると「虚ヲ虚シ、実ヲ実ス」結果になり大変危険なことになると戒めています。

(補中益気湯の処方構成)

補中益気湯の構成は黄耆・人参・甘草・白朮・当帰・升麻・柴胡・陳皮・乾姜・大棗の10種の生薬です。

君薬は黄耆です。脾が虚せば肺も虚すので、黄耆は脾と同時に肺を補います。肺は「百脈ヲ朝シ、気ヲ主リ」脾と密接な関係にあります。脾で生成された気は肺に昇提され、肺を經由して全身に配布されるのです。補中益気湯の特に憂れた点は、従来の脾だけを補う補気剤とは異なり、脾で生成された気がさらに肺に昇提され全身に回るように工夫されたところにあります。

人参が臣薬です。人参は黄耆と協力して気虚に因る全身倦怠感・食欲不振・息切れ・無気力・自汗などを治します。

甘草も人参と共に臣薬です。脾を補い元気を益し、虚熱を清す働きがあります。

佐薬は白朮と当帰です。白朮は脾を補い脾が嫌う湿を乾かします。また黄耆と共に気虚に因る自汗を除きます。

気が虚せば遠からず血も虚すので、当帰は血を養います。

他の諸薬は使薬です。先ず陳皮は理気薬です。補気すれば一方では必ず気が滞るので、陳皮で脾に生じた気を能く巡らすように配慮してあります。柴胡と升麻は前に説明した本方独特の発想から来るもので、脾胃で生成した気を肺に昇提する薬です。柴胡で少陽の気を昇提し、升麻で陽明の気を昇提します。乾姜と大棗については今まで他の処方で説明したように、脾胃を補い正気を養います。姜棗は原典には記載がありません。これらはショウガとナツメで、昔は各家庭の庭に植えてあって、薬店で購入した生薬に自分で適当に加えて煎じたのです。

(補中益気湯の証候および臨床応用)

以上述べてきたことから、**補中益気湯**をどういう症状を目安に用い、臨床の場ではどのような場合に応用できるか考えて見ます。

補中益気湯証は過労・不節制・ストレス・虚弱体質・老齢・大病などが原因となって脾胃が傷られ元気が生成されなくなり、その結果全身がエネルギー不足の状態に陥って種々の機能低下を生じ、それに対し代償性に仮性の興奮状態が起って虚熱を生じたり、あるいは

は外邪に対する抵抗力が著しく低下して、多種多様の病証を生じた状態です。何病に限らず、虚に因って生じていると疑われる病や、或は心身症的な不定愁訴や所謂鬱症状などにも先ず思い浮かべて良い処方であろうと思います。

また気虚のヒトは中気下陷とって、不足した気は上に昇る力が無く下に落ち込むので、内臓下垂、特に胃下垂を生じたり、女性では子宮脱や膀胱脱などになるヒトを多く見かけます。**補中益気湯**はこのような中気下陷の証にも能く奏効します。